住まいセミナー

vol3

家づくりについて総合的に学ぶ連続講座「住まいセミナーvol3」（徳島新聞社主催）が9日、徳島市内の新聞放送会館で開かれた。「暮らしやすい間取りと自分流のインテリア」をテーマに一級建築士の富田眞二さんと、インテリアコーディネーターの土井朋子さんが講演。富田さんは「快適な間取りを考える」と題して、機能的かつ精神的に満たされる間取りについて具体例を紹介。「情緒や潤いの感じられる空間が居心地の良さにつながる」と話した。土井さんは「自分流インテリア入門」と題して、インテリアコーディネートのポイントとして室内の色の配分の仕方や複数の照明器具を使うことで室内の雰囲気を演出するなどの例を挙げた。講演要旨は次の通り。次回のセミナーは11月11日午後1時から新聞放送会館で「趣味を生かせる空間とこだわりの設備選び」をテーマに開く。

快適な間取りを考える

情緒や潤いある空間

富田　眞二さん　一級建築士

居心地の良い住まいは、機能的側面と精神的側面の二つの要素を満たす必要がある。機能的側面とは、家族の動線を考慮した間取りや安全性、耐久性、断熱性など性能表示や品質管理に関するもの。ところが、機能性が完ぺきな家に住んだとしても、何かしら満たされない気持ちを抱く人が多い。その「何か」こそが精神的要素である。

年月とともに愛情の深まる素材選びや、生活の中に営みが感じられる工夫、五感をはぐくむ仕掛けなど、情緒や潤いを大切にした住まいにこそ、精神的側面を満たす答えが隠されている。

家族が集まる居間や食堂には、吹き抜け空間を提案することが多い。吹き抜けは、上下の空間をつなぐため、上階にある子供部屋とのコミュニケーションがとりやすい。幼児期や発育期、個室に閉じこもりがちになる反抗期などには大いに力を発揮してくれる。階段の位置を居間に設けることで、親と子供が顔を合わせる機会が増えて、非行を未然に防ぐことができるという調査結果もある。間取りは家族の相互関係に大切な役割を果たす。

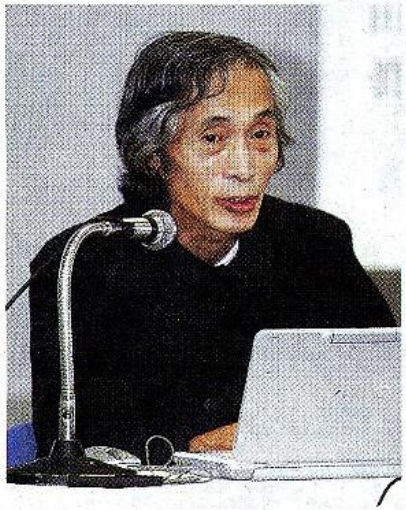
吹き抜け空間は冷暖房効率が悪いといわれるが、特に問題になるのが冬の暖房。そこで、まきストーブや床暖房を採用する。まきストーブは一台で四、五十畳大の空間を暖める能力があり、大空間には理想的な暖房設備といえる。天井にプロペラファンを取り付け、暖かい空気を下層に下ろす工夫をすれば快適に過ごすことができる。まきの調達が難しい場合は、床暖房がお薦め。深夜電力利用の蓄熱式電気床暖房を採用すると、ランニングコストが下がり、石油ストーブ並みの燃料費で賄うことができる。

豊かな四季を持つ日本古来の家屋には、縁側や通り庭、土間など内と外をつなぐ空間があった。雨の日には縁側で軒から落ちるしずくの美しさに見とれ、夏場は風鈴の音に涼を感じる情緒があった。

戦後の洋風住宅ブームの中で、土間や縁側は消えていったが、縁側はデッキテラスに名を変えて現代の住宅にも登場している。心の豊かさが求められる現代にこそ、空間のぜいたくに目を向けることで、数値では図ることのできない暮らしの満足感が得られるのではないだろうか。

玄関やポーチも、工夫次第で来客を歓迎する気持ちが伝わる空間になる。玄関までの長いアプローチは決してマイナス要因ではなく、来客がドアを開ける楽しみを増大させる仕掛けになる。アプローチに花壇や置物など住まい手の心を伝えるしつらえがあれば、訪問者は温かい気持ちになるだろう。しつらえを演出できる空間や仕掛けづくりが建築士の役割といえる。

家づくりでは、住みやすさや使い勝手の良さなど目先の利便性が重視されがちだが、目には見えない暮らしの豊かさが感じられる家こそ、居心地の良い住まいといえるのではないだろうか。



とみた・しんじ　那賀郡那賀町生まれ。日本建築家協会四国支部事務局長。住宅設計の仕事を中心に取り組んでいる。

自分流インテリア入門

テーマ固め　取捨選択

土井　朋子さん　インテリアコーディネーター

インテリアの具体的な要素は、内装材、家具、カーテンなどのファブリック（布製品）、照明、小物、設備機器など多岐にわたる。インテリアの要素を統一し、一軒の家の中にイメージの流れをつくることが大切。

最初に、自分なりの大まかなコンセプトやテーマを固めておくと、インテリアに関する取捨選択がスムーズになる。コンセプトを固めるためには、普段から雑誌などで気に入ったインテリアの写真を切り抜いて集めたり、映画やドラマのインテリアに着目したりしてみる。

切り取った写真やイメージを集めてみると、自分の求めるインテリアの雰囲気を客観的にとらえることができる。大切なのはモノを選ぶことではなく、空間の雰囲気づくり。自分自身の傾向を知り、本当に必要なインテリアを見つけてほしい。

インテリアデザインの重要な位置を占めるのがカラー計画。少ない予算でありながらおしゃれなインテリアにしたい場合、色使いが抜群の威力を発揮する。色の配分はベースカラー（床、壁、天井など）、サブカラー（建具、家具、カーテンなど）、アクセントカラー（小物、クッション、絵画など）のバランスを考え、自分にとって心地の良い配色を探してみる。

色の組み合わせは、下層を濃い色、上層を明るい色にすると落ち着いた空間になる。その逆の配色にすると変化と動きのある空間づくりができる。素材によっても空間の雰囲気が変わる。硬質な無機素材、ぬくもりや親しみを感じさせる自然素材など、自分の求めるインテリアのイメージに合わせて色や素材の選択は慎重に行ってほしい。

照明も大切な要素の一つ。一室の中でダウンライトやス

とい・ともこ　香川県高松市生まれ。徳島インテリアコーディネーター協会代表。住宅や商業施設、医院などのインテリアデザインを手掛けている。

熱心に講演を聴く参加者＝新聞放送会館

目には見えない豊かさ

色や素材で空間変わる

タンドなどを複数組み合わせて一室多灯にすると、時間帯や場面に合わせて部屋の雰囲気を演出できる。照明器具は低く配置すると落ち着く。ベッドのヘッドボードの後ろに照明器具を置いてやわらかな光を演出するのもおしゃれ。リビングや寝室にはぜひ多灯をおすすめしたい。

インテリアもカラーも上手にまとめたのに何かが足りないという場合は、フォーカルポイントを意識してほしい。フォーカルポイントとは自然と視線が集まるインテリアのポイントのこと。例えば絵画を飾る、観葉植物を置くといった手法が一般的。絵画はソファやいすに腰掛けたときの目線に合わせて飾るのも効果的。

技術的なポイントのほかに最も大切なことは、自分のことや家族のことをよく知ること。休日の過ごし方や出掛けたい場所、ファッションの傾向など、日ごろの行動に着目してみるのも一つ。好きな色や落ち着く配色、雰囲気を家族が共有しながらインテリアデザインに取り組むと、家族が居心地良く感じる空間づくりが実現できる。決して情報にとらわれず、自分自身が想像してイメージすることを忘れないでほしい。